第３回藤沢市教育振興基本計画評価委員会議事録

日時　　２０１２年（平成２４年）８月１０日
　　午後３時００分～４時４５分
場所　　森谷産業旭ビル４階第１会議室

１　藤沢市教育振興基本計画の進行管理

２　平成２４年度（平成２３年度対象）教育委員会点検・評価結果講評

３　評価委員から本市へのアドバイス

竹村主幹　開会

高橋委員長　こんにちは。今から第３回教育振興基本計画評価委員会を始めます。
　まず、進行管理でございます。２９ページ以降に一覧。これについてご質問を。どこからでも結構ですので、お気づきの点をお願いします。

新井副委員長　全体としてＡの評価が多く、順調だと思います。特に就学援助の拡充事業。今の貧困の問題に対応しているのはいいことだと思いました。３－３－３，４，５など C の評価もいくつかありました。学校施設についてエアコンや空調について電力節電もあるのでやむを得ないとは思いますが。３－３－５で屋上防水補修。私の研究室の近くでも雨漏りがして困っている。基礎的な補修工事は必要だと思うが、なかなか進まない事情を、財政的な事情があるかと思いますが、もう少し教えていただければと思います。

高橋主幹　私どもの学校施設課で施設の維持管理を行っています。やはり財政的な事情が一番大きな事情でございます。現在トイレ改修・空調を優先的に進めていく中で、他の改修工事まで予算的に厳しい状況にあります。例えば外壁は今年度１校やっていきますが、１校あたり１億２千万から５千万の予算がかかるということで、一般財源だけで対応するのは厳しい状況でございます。特定財源を確保しながら進めていきたいと考えております。当初の計画よりは遅れますが、年１校程度は今後も進めていきたいと思います。

竹村主幹　小澤委員の紹介

北橋委員　概ねＡで良かったと思います。自分に関わるところで言いますと、７－２－４放課後子ども教室推進事業や７－２－５学校・家庭・地域連携推進事業については、携わっておりますので実感としては現場では頑張っているので両方ともＡをくれればいいなとは思いました。ただ、放課後子ども教室はなかなか増えないと聞いている。現在行われている私のところの亀井野小は非常にがんばっているなと思います。そういう報告があがっているかと思いますが、是非現場の声を聞いていただいて、今やっているところを応援してほしいなと思います。

もう一つ、学校・家庭・地域のほうは三者連携事業ということなんですが、年齢も団体もいろんなところが関わっているところなので、おやじの会について繰り返し書いてありますが、おやじの会は希望するところは作ればいいということで、成り行きに任せていっていただければこれからも進むと思います。各地域にまかせたメンバー構成で、是非これからも進めてほしいと思います。各課から補足があればお願いします。私からは概ね良くやっていただいていると思います。以上です。

高橋委員長　何か今の関係の課の方お願いします。

鈴木参事　前段は青少年課です。後段のおやじの会は自主発生的に設立されてきていると思います。行政から働きかけて作るべきものではないと思いますが、設立していきたいという意向があれば側面的に積極的に支援していきたいと思っております。いずれにしても各地区のいろんな団体が子どもの育ちを助けていく重要な事業と思っておりますので、今後も支援していきたいと思います。

高橋委員長　岩野委員さんよろしいですか。

岩野委員　Ａ評価が多くてちょっと安心した。保護者としては学校の設備の状態がＣ評価がついているところが多いのかなというところが気になる。保護者の側もある程度のことはあきらめつつ、成り行きを見守っているというところもありますので、最低限のところをやっていただければいいと思います。

芸術スポーツ関連もまんべんなくわりとＡ評価が多くて安心しました。芸術面やスポーツに関しても市として取り組んでいただいているんだなと安心しました。

学校の適正配置３－２－２になりますが、Ａ評価をいただいているのですが、保護者は心配している部分でもありますので、もう少し詳しくお話を聞かせていただけるとありがたいです。

中村補佐　こちらの事業ですが、研究事業ということで今現在やっています。詳しい状況を言いますと、いわゆる松下の跡地ということで藤沢サスティナブル・スマートタウンですか、住宅建設が話題となっております。辻堂小学校と湘洋中学校の学区ですが千戸程度の住宅やマンションが建設予定ですので、直近の課題となりますが、こちらのほうの学区をどうするか検討している状況でございます。以上でございます。

高橋委員長　私もちょっと。二つあるんですが、一つは５－１－２，３，４、ページで言うと５４ページです。藤沢市は岩野委員さんからもお話があったように芸術文化に力を入れているのはよくわかります。この辺に関してはほとんどＡということで順調に進んでいるように思うのですが、５－１－４で助成団体が１５団体でということがあるんですが、今いろいろな社会教育の団体が縮小気味だとか、担っている方が高齢化しているとか、例えば読書活動など読み聞かせする人の高齢化とか、縮小気味の傾向の話しも伺うのですが、藤沢はこういう団体は増えているんでしょうか、そのへんをお願いします。

神尾参事　５－１－４の文化活動支援事業ということで２２年度５団体出させていただいています。これにつきましては未来創造事業団の芸術文化事業部が担っております助成事業ということで実施しています。この事業につきましては毎年１０団体から１５団体くらいが自分たちの事業の内容を財団に申請しまして、その内容を審査しながら５団体から１０団体くらいに予算額年間１００万円を限度額に各団体に助成しているという事業です。

今お話のありました文化団体がどうなのかということでございますが、藤沢の場合には市内１３の公民館がございまして、多いところでは３００以上の団体を抱えている公民館も南部方面にはありますし、御所見とか遠藤になりますと７５とか１００くらいの団体が公民館を利用しているという状況です。おっしゃられるように高齢化しているのも確かです。しかし、各団体とも若年層、小学生とか中学生、そういう子立ちを取り込んでいくような努力もしております。各センター、公民館では毎年文化祭という活動もしておりまして、その中で子どもたちが一緒になってお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんと一緒になって参加しているという現状もございますので、少子高齢化の中で難しい部分でもありますが、そういう努力を藤沢市は過去から今までずっと積み上げてきて、市民会館ですとかそういうところで全体の公民館ですとかそういうところで活動してきたものの集大成を発表しているという場になっております。

高橋委員長　是非こういう文化事業はよこだけでなくたての関係を。異年齢、いろんな年齢の方々、高齢の方々から中堅の方々、若い方々へバトンをタッチしていくということも意識的にやっていただきたいと思います。

もうひとつ、全く別のことで、どうこの問題を考えているかお聞きしたいのが４０ペー

ジ２－４－１要保護準用保護児童・生徒援助事業です。経済的な理由で未就学の解消とか義務教育の円滑な推進で、例えば目標が３，７９９人の小学生に助成をするわけですが、２３年度は数が上回って、確かにＡで良いのですが、こういう子どもや家庭が増えること自体は正直言って望ましいとは言えないわけです。つまり事業としては達成したけれど、これを行政全体で見るとどういうふうに考えたらよいか、個別の部署の問題だけでなく、教育の問題が福祉の問題と連動するところについてどう考えているのかお願いします。

中村補佐　目標は、人数が少ないことに越したことはないと思います。目標というのは推計ととらえていただければなと思います。直近の状況といたしましては、リーマンショックの影響を受けまして、平成２２年度がかなり前年度に比べまして増えています。２３年度は伸び率は若干減っています。この事業につきまして、福祉的な意味合いが強く、生保受給者の助成も年々増加している状況です。市といたしましては基本的には国の法律に定められたなかで行っていますが、あとは市として独自に法律以外で何ができるか考えた結果、今年度から卒業アルバム購入費を新規の項目として支給している状況でございます。

高橋委員長　ありがとうございます。ある意味では、Ａだからめでたし、めでたしとはならない。いろいろな行政の方々にも理解してもらわないといけないと思います。

　あとはよろしいですか。Ａ評価が多く概ね予定どおり進行していることが確認されました。意見のでたところは参考にして進めていっていただければと思います。

　では、点検・評価の講評に移らせていただきます。一人ずつ意見交換しながら。まず、一つ目の熱意と指導力のある教員の育成の３事業について行います。ご意見を伺う前に追加してご質問はありますか。

新井副委員長　ただいまの進行状況にも関わりますが、１－２－１各教科研究研修関係事業の平成２３年度の評価と課題を見ますと、授業時間数の増に伴い、研修時間の確保が課題とある。研修の方法等改善を図る必要があると書かれているんですね。具体的な問題点をもう少し詳しく説明していただければと思います。

高石参事　新学習指導要領の実施に伴いまして、授業時数が増えております。小学校と中学校で、校内研究が放課後に行われること、授業時数が増えることによって放課後の時間数が減ってしまい、会議や研修会が持ちづらいというのが学校からあがってきている課題でございます。そうはいっても、各学校では工夫をして、会議を効率的に行うとか、情報をあらかじめ共有するというようなことで、課題を解決する工夫をしているところでございます。

高橋委員長　あと質問はよろしいですか。では講評をお願いします。

新井副委員長　各教科研究研修関係事業は、各学校の校内研究会や研究推進校の取り組みなど、実践的な授業研究を自主的に行うということで、教員の専門性を維持向上させる上で重要な取り組みだと思います。また、新規教員及び教職１，２，３，４，２０年の経験者の研修会の開催というのは、これだけをみるとわかりづらいですが、県の教育委員会の行っている研修と組み合わされて、全体として適切な年次経験者に対応する研修になっていると思います。書かれているとおり授業の成果や効果もあると思います。検討すべき事柄として、さきほど質問させていただいたのは新学習指導要領のもとで授業時数が増えて、放課後の時間が少なくなったと、それによって会議や研修を行う時間数が少なくなったということがあるんですが、研修の時間数が増えて教員の負担増になっていないかどうか。また、研修というと研究と修養ということで本来自主的なものであるはずですが、どちらかというと受け身になっていないかが心配です。そうしたところを課題といいますか、配慮事項としていただければと思います。

教育文化センター研究研修事業につきましては、昨年度とほぼ同様ですので、昨年度は総合的な視点から見る必要があるということを指摘しました。それにつきましては、前回の話しで校内研究推進担当者会を組織して情報交換や研究交流を行っていると、また校内研究会に教育文化センターの指導主事が参加するなどの対応をしているということで、概ね適切だと考えております。昨年度も指摘しましたけれど、教職員がどういうふうな研修を行っているかについて保護者、市民に広報活動を活発に行っていく必要があると思います。そのへんが課題かなと思いました。

ふじさわティーチャーズカレッジ「学びあい」事業についてですが、目標、成果はそれなりに成果も上がっているかと思いますし、目標も適切かと思います。藤沢市の採用数も伸びているので概ね適切かと思います。この事業自体は二つ目的がありますね。新採教員の急増に対応した実践的な知識や技能、基礎的なことだと思いますが、これを採用前に習得させることと、臨時的任用教員が近年増加しているかと思うんですが、臨時的任用教員や非常勤の研修、資質、能力の向上がもう一つの課題だと思います。いずれも重要なんですが、理論的にはそれぞれ区別した事業もあり得るかと思います。私のゼミの卒業生で教員採用試験に落ちた学生がいるんですが、にもかかわらず臨時的任用教員になってすぐに担任を持ちました。それでは初任研は受けられないんだろと言ったら、受けられないという話しで、臨時的任用教員の研修の問題は重要な問題ではないかと思っているのですが、その問題と新採教員の急増に伴う資質、能力の向上は今のところ二つの事業を合体させて、学生のニーズと臨時的任用教員のニーズは違いはないんだという話しでした。学生にとっては臨時的任用教員から学ぶことも非常に多いということで、学びあいの事業というタイトルどおりうまく機能しているということですので、そういう意味ではこのまま順調に評価することもできるかなと思っていますが、もしかしたら潜在的に二つの目的がそごを来すことがないのかと思うところもあります。

岩野委員　研修で先生方全体の技術の底上げが図れるのは喜ばしいことですし、子どもたちにとっても良いことだと思っています。ただ同じような先生がたくさん増えないかなということがちょっと心配です。授業もいろいろな先生の違いを子どもたちも楽しんでいるところもありますし、子どもたちにとって魅力がある大人としての先生ということで、学校で教えるべきことをきちんと教えられるのはもちろんなんですが、個性的な授業もできるということを両輪でやっていけるシステムがあると良いのかなと思います。金太郎飴のような先生ばかりだと学校がつまらなくなってしまうのかなと思いました。

ティーチャーズカレッジについてですが、臨時的任用教員の先生の研修の場があるのはとても良いことだと思います。実際に学校で子どもたちがお世話になっていて、本当に臨時的任用教員の先生といっても人間的に素敵な方が多くて、授業もお上手で、なんでこの先生が臨時的任用教員なんだろうと思うことが多いと保護者として感じています。そういう方が学生さんにいろいろなことをまた伝える場があるというのはとても良いことだと思いました。

北橋委員　２年前のこの教育振興基本計画を作った頃のことを思い出しました。いろいろ議論をしました。熱い思いがあったものですから、それを振り返ると、若い先生方に今の先生方の技術を伝えるというか、経験を伝える、若い先生たちをフォローするということがここに出ています。教育文化センターのこともありますが、現場に強い先生を育てているんだなと感じます。頭でっかちな先生ではなくて、現場でしっかり対応できる、子どもたちと一緒に成長してくれる先生を、育ててくれているんだなと思います。教育文化センターではいろいろな実験もやっているようですし、本当に若くても経験豊富な先生が増えているのかなと思います。最後のティーチャーズカレッジですが、この藤沢で教師になりたい人を増やしてほしいですね。この事業は是非これからも発展させてほしいと思います。日本中、先生はいっぱいいるんですが、湘南地区の藤沢地区の先生らしい先生に育ってほしいと思います。いつまでも若いエネルギーを失わない先生をこれからも支援してほしいと思っています。話しを聞いて心強く思った次第です。

高橋委員長　私のほうからも一言申し上げます。委員さんからもありましたが、金太郎飴のような先生ではなく、若いエネルギーにあふれた先生を是非ということで、藤沢市は昔から先生方はいろんな方々がいらっしゃって、いろんな考え方、教育観をお持ちの方がいて、それはある意味では多様性の中で協力して学校を作っていく力があると思っています。そういう意味では各教科の研修の事業でも教文センターの事業でも、いろんな形での研修を考えているのがわかります。特に教文センターでは指導主事の方が学校を訪問しています。以前、私は相模原市の研修システムについて検討する会の委員になった時に、ニーズに合う研修が大事と発言しました。もちろん学習指導要領の内容が変わり、中身について

しっかり把握することも大事なんですが、若い先生の場合は何が何だかわからないところもきっとあって、しかも学校の中にもなかなか相談できない状況もあるかもしれない。そういうときに助け船を出すような形で指導主事の方々が学校を訪問して、そこで身になる形でアドバイスをしてもらえればいいのではないかと思っています。私、相模原では全体が集まってレクチャーをするというのは最小限度にして、訪問やニーズにあった研修、アドバイスをするシステムを作ったら良いとずっと言ってきて、今そういう形で進んでいます。

若い先生とベテランの先生というのは、良いところと悪いところがちょうどコインの裏表。若い頃の私の授業は下手で、学生がみんな寝てしまうような授業だったのですが、教え子が、でも先生一生懸命教えてたよねと言ってくれます。若さがいろんなものをカバーしてくれるところがあるんです。それを一概に未熟とは言えない。未熟の中にもいろんな芽がある。そのほうがまた子どもたちのことを理解できる。同時にベテランになると落ち着きがあって全体が見えますので、技術や経験で乗り切れるが、逆に言うと子どもたちが本音を言わなくなるかもしれない。そういう一長一短あるんです。往々にして研修というと若い人にしっかりこれこれを教えるというふうになりがちですが、むしろ、若い人のやる気や意欲や参加意識を引き出す研修を組んでいただきたい。それにはニーズ調査を深めながらやっていただければと思った次第です。

もう一点、ふじさわティーチャーズカレッジですが、藤沢市の採用が年々増えているのは喜ばしいことです。昨日、実は綾瀬市の外部評価委員をさせていただいたのですが、綾瀬市にはこういう塾がないわけです。私に他の市ではどういう形で若い人の研修を組んでいるのか聞かれたときに、藤沢の例をお話ししました。藤沢は神奈川県でもいろいろリードする地域ですのでこういう形でティーチャーズカレッジを進めていってもらいと思います。

以上が施策の柱２の熱意と指導力のある教員の育成でした。では学校教育分野のもう一つの柱であります一人ひとりのニーズに対する教育の推進の４事業について同じように意見を伺っていきます。

まず、追加して質問はございますか。私から、１４ページの細かなことで恐縮ですが、目的の２行目、生徒の基礎的・基本的な学力の定着という言葉があるんですが、基礎的・基本的な知識・技能という言い方はあるんですが、学力は基礎学力とは言いますが。基本的と基礎的を分けるということは普通はしないと思うんですが、このへん理由がありましたら教えていただきたいのですが。

小沼課長　特にこだわったところはございません。ここに来る生徒さんの中には基礎学力が定着していないためになかなか授業について行けないという場合もありますので、そこは基本に立ち返って、一から、かなり前に戻って教えているような報告がたくさんあがってきますので、そのへんを意識して書いております。

高橋委員長　できれば基礎的・基本的な知識・技能の定着に直していただければと思います。他にはよろしいですか。では新井委員さんからお願いします。

新井副委員長　１－５－１特別支援教育推進事業ですが、非常にニーズが高まっていますので介助員派遣事業ですとか特別支援学級の大規模化解消など、様々な施策の必要性などがどんどん高まっていると思います。ただ、そのニーズに応じてということを理解する上で、８ページの進捗状況のところで、６２，３７０時間の派遣を行ったと書かれていますが、６万時間といわれてもわかりづらいですよね。総括的な報告書なのでやむを得ないのかもしれませんが。ただ、ニーズに対してどれくらい応え切れているのということに対して、こういう表現ではわかりづらいので、ニーズがどれくらいで、それに対してどれくらい達成しているのかという評価ができないかなとちょっと思いました。全体的にはこの事業がそれなりの成果を上げていることに対してはその通りだと思います。

教育相談事業や不登校の事業などいずれも重要な活動だろうと思いました。特に子どもの貧困の問題とか、それに対応する施策の必要性、経済的な援助だけでなく、教育心理的な援助、福祉的な援助ということでＳＳＷの派遣など、非常に重要なものだと思います。

不登校の問題につきましては、前回の会合で数を聞きまして、減少しているという話しがありました。私が数を聞いたのは現状を理解したいという趣旨でして、不登校をなくす、減少させることそれ自身を数値目標のような形で設定すると逆効果ということもあり得るので、そうした目標はあまり設定すべきでないと思っています。ただ、相談に来るのを待つだけでなく、こちらから出かけていく訪問型の学習支援や相談ができないかということを感じました。埼玉県の志木市にはホームスタディ制度というのがありますが、希望する場合は児童生徒の家庭や施設に有償ボランティアの学生などが行って学習を支援しているようです。あせらず、押しつけず、見放さずというのを基本に進めているようですが、相談事業では来るのを待つのですが、希望する場合は積極的に訪問するのはあり得るかと思いました。

中学校の学習支援事業につきましては、外国籍の生徒もかなり参加しているようですので、うまく機能していると思います。

岩野委員　特別支援教育推進事業ですけれども、今まで同じクラスの中で特別な支援が行き届かなかった子たちに、必要な支援がされるようになってきて、学校というシステムの中になじみやすくなってきているのは、学校に何度か足を運ぶ中で実際に感じてきています。本当に居住区内の学校に就学できるのは親にとっても子どもにとっても大きなことだと思います。子どもたちが自分たちの住んでいる地域に通うことができて、地域の催しに学校の友達と参加できるという当たり前のことが当たり前にできるように、これからも行っていただきたいと思いました。

学校教育相談センター事業に関しては、子どもたちの中でも、親にも認識が高まってきて興味も高まっているところで、お世話になっている方がどんどん増えているのではないかと感じています。ＳＳＷさんが対応しづらいところがあるのは、やはり家庭の問題が学校に持ち込まれることが増えてきたということもあって、学校の中だけで解決するのも難しい事例がすごく増えてきているのかなと感じます。またＳＳＷさんの人数を増やすだけでなく、人の素質が大きく関わってくると思いますので、そういう方々のスキルアップも是非やっていただきたいと思います。

不登校ですが、昔とくらべて家庭の側が不登校に抵抗がなくなった部分も多少あって、学校だけがすべてではない、というところあります。また保護者の側も、不登校になったお子さんのお母さんと話しをすると、どこかで必ずそういう話が出ることもあります。学校以外のところで学校に戻ることができるチャンスを作るというような場所も増えてきているということもあって、学校には昔よりは戻りやすくなっているかな。また、保護者の側も昔よりは悩まずに済んでいるのかなと思います。ただ、まじめな方はお子さんの不登校のことで本当にまいってしまうということもたくさんあります。ご夫婦の中で、子どもの不登校のことでお母さんが責められてしまう。おじいちゃん、おばあちゃんや旦那さんに攻められてしまって、家庭の中でお母さんが孤立してしまう状態もあります。不登校のお子さん本人もそうですが、保護者のサポートも今まで以上に周知してやっていただきたいと思います。

中学校学習支援事業については、参加した生徒さんがわからなかった問題がわかるようになったということがすべてだと思います。うちの子も夏休みもほぼ毎日学校に行っています。これには入らないかもしれませんが、教科担任の先生が補習してくださるというので毎日１時間程度行っています。こういう機会があれば、塾に行くのも気分的に大変な部分もあるので、慣れている教室に行って勉強できるだけでも助かります。これからも幅広くやっていただければよいと思います。

全体を通して、特別支援にも入らない、でも普通教室で普通の子というにはあまりにもちょっとという学習障害もそうですし、また生活面で不便を感じているようなお子さんに対するサポートがもう少し具体的に何かできないのかなというところはとても感じるところではあります。

北橋委員　一人ひとりのニーズに対する教育の推進ということで、一人ひとりのニーズというのは行政サービスの最高の目標だと思います。ここは自分の身になって考えました。一番目の特別支援教育に関しては、身の回りに支援を必要とする子がいるということは、大変なんですが一般の児童生徒には良い影響を与えると思います。今、私の近くの学校でも特別の教室を作ってトイレをなおしたりしていましたが、マイナス面ばかり考えずにプラス面を考える生徒さん、保護者が増えてほしいですし、是非特別支援に関しては皆一体となって考えてほしいと思います。よく考えていらっしゃると思います。一般の生徒さん

にも良い影響が出ていると思います。

教育相談センターについてですが、スクールカウンセラーという言葉はよく聞いていました。昨年うちの地域で被災地から学ぶことという講演会を夏休みにやりましたけれど、その時にスクールカウンセラーの方に被災地のことを聞かせていただきました。また、私も子ども６人おりますけれども少なからずお世話になっております。各学校に対してカウンセラーのサービスが増えていただければありがたいと思います。ＳＳＷについては本当にご苦労があるなと思います。福祉関係の連携が必要になってきていると思います。現場では数字では表せないくらい苦労されていると思うので、私は、まず一つは数を増やしてほしいと思っていますが、あらためて推進してほしいなと思っています。

そして不登校ですが、こちらもうちの子も関係するなと思っています。八ヶ岳キャンプをやっているということで、すごいなと思いました。保護者に対しておしゃべり広場をやっているということですね。やはりまじめな保護者ほど悩んでしまいますので、保護者に対するフォローを是非これからも進めてほしいなと思います。不登校に関しては、保護者のケアに関しては、おしゃべり広場みたいなものを数の開催してほしいなと思います。不登校は減っているということですが、この問題は日本中にありますので、これからも続けてほしいと思います。

中学校学習支援事業ですが、基礎的なことということで、ありがたいことだと思っています。課題のところに学校支援コーディネーターを活用すると書いてありますが、現実的には学校支援コーディネーターがいてもいなくてもすでにこういう支援は始まっていると思います。ですから学校支援コーディネーターを利用されるところはどうぞ利用していただいていいんですけれど、学校支援コーディネーターがいらっしゃらないところでもすでに現場でこういう支援をしていると思いますので、今の形をこれからも続けてほしいなと思いました。

全体的にはこれはとても行政サービスとしては大事なところだと思いますので、是非予算だけでなく、人数面でも拡充をしてほしいと思いました。

高橋委員長　私からも一言申し上げます。まず、特別支援教育推進事業ですが、ここの一人ひとりのニーズというのは、ある意味では最も基礎的なサポートですね。特別支援であれ、カウンセリングの問題であれ、不登校であれ、あるいは学力の基本の徹底であれ、やはり一番ベースになるところのサポートなんですね。やはり日本社会が大きく変化してきて、戦後は貧しかったけれど、みんな同じように貧しいわけですから格差もないし、同じような悪条件の中で学校に行って勉強してきたわけですが、それが高度成長を経て、特に８０年代の終わりのバブルの崩壊以降、９０年から２０００年代になると、本当に家庭の年収も減りますし、労働の形態も非正規雇用も増えました。それから高度成長期は夫が働いて妻が家にいるという専業主婦というパターンも多かったのですが、今は逆転しています。専業主婦のほうが少数派。働かないと経済力を維持できないということもあります。

いろんな形で日本社会が大きく変わってきた中に子どもたちは置かれている。セーフティーネットと言っていいんでしょうか、子どもたちが置かれた生活学習条件が多様になってくるということだと思います。藤沢も例外ではなく、いろんな形で支援が必要になっています。２３年度の実績をみるとよくやっていると思います。介助員の派遣とか。横浜市ですが学校を見させていただくことがありますが、小学校低学年で、子どもたちが立ち歩いていたりするこれが授業？というような授業もみました。ＴＴの場合が多いのですが、一人の先生が子どものフォローをしながらやっていて大変だなあということもあります。藤沢市でもそういう介助員の派遣を大がかりに進めてきたということがわかります。

学校教育相談センター事業も前年にくらべて市のスクールカウンセラーへの相談対応が１０ページの進捗状況を見ると、前年にくらべて小学校では４７０回増、中学校では６５１回増、就学相談の件数も１０４件増、電話相談も増。つまりみんな増えているわけです。普通は数が増えるのは良いことなんですが、これはこういう問題を抱えてきた、それに対して教育委員会、学校でしっかり対応してきた、ということを、いろんな形で市の行政全体に対してＰＲしていいんじゃないか。つまり学校教育に対してもっと家庭や地域や行政がしっかりフォローしていかないと学校の学び自体が十分たちゆかなくなるんだ、というようなことを私はもっとＰＲしていいんじゃないかという思いがあります。それくらいしっかりやっているということです。これを単に委員会内部だけのデータにしてはいけないと思うんです。

不登校の生徒への対応。これもさきほど北橋委員さんもおっしゃってましたが、いろんな例がありますが、あるデータによると親の期待が強すぎる場合、子どもがそれに対応しきれなくて、いわば自分をだめ人間と思いこむことによって、学校に行けなくなってしまうことも多いそうです。往々にして保護者が神経質になってしまって、特におじいちゃんおばあちゃんの世代、僕らの世代ですが、学校に行くのは当たり前と思っています。しかし、学校に行かないというのは、現代社会の複雑ないろんな要素の中で子どもたちは生きているので、私は今は一つの選択肢となっていると思います。一つの選択肢の中でフリースクールやいろいろな子どもの居場所を行政も、しっかりそういう場所を作っていきつつあります。教育委員会もそういうところを、不登校の数が減ったというだけでなくて、フォローしてほしいです。ふれあいキャンプなども呼びかけるなど、子どもたちと地域の生活、学習施設と連携を広げながら、やっていくのがいいのではと思っています。

中学校学習支援事業。今よく格差社会と言われています。同じように学力にも差がある。できる子はとことんできるのですが、できない子はとことんできない。以前に比べると二極化はいろんなデータから見えています。子どもの未来に対して希望を持たなくてはいけない。往々にして学力が低いと自尊感情が低くなって、未来に対して投げやりになってしまう。それはやはり子どもにとってまずいことになるので、こういうふうに学校で夏季休業中や放課後にしっかりフォローアップしてくれると、子どもにとって、敢えてて言いますが救いになると思います。１５ページのアンケート問２であなたはこの学習会に参加し

てそう感じますか。○をつけてください。という問いに、役に立っているが９５．８％でよすね。おそらく普通の授業より役に立っていると思います。普通の授業は行くのは当たり前だし義務ですけど、ここは自分で選んでいくところが役に立つと実感しているところだと思います。是非、次年度以降も続けてほしいと思います。

高橋委員長　それでは次に生涯学習分野の柱②の「多様な学びを支援する図書館活動の推進」の６事業について意見を述べていきたいと思います。この６事業について追加して担当課に質問のある方はいらっしゃいますか。・・・とくにございませんか。・・・それでは、先ほど同じように新井委員さんからお願いいたします。
新井副委員長　全体としては、こども読書活動推進事業ですとか点字図書館事業、障がい者・高齢者への宅配サービス事業など、きめ細かく、特別のニーズをもつような人々に、多様な学びを支援する独自の事業を積極的に展開されていると思います。
　図書館情報ネットワーク事業というのは、これはできれば便利なんですけど、なかなかお金がかかったりとか不具合が生じたりとかですね、困難があるかとは思いますが、こういうシステムができあがることは、非常に重要なことだと思いますので、是非実現していただきたいと思います。特に関心がありますのは、総合市民図書館運営管理事業と総合市民図書館市民運営事業であります。基本的には４つの観点からほぼ円滑に移行したと言うことで非常に喜ばしいことだと思います。辻堂市民図書館の利用状況、貸し出し者数と貸し出し件数が低下したと言うことですが、この原因については１９ページに書かれていました計画停電あるいは夜間開館の中止あるいは台風による停電等に伴う臨時休館等という、前回のご説明ではこの「等」の中に茅ヶ崎市民が数万人規模でいなくなっているというお話もありましたので、この減少した原因については引き続き調査をしていただきたいと思います。
　図書館につきましては、市民の知る権利を保障する非常に重要な役割を果たしていると思いますので、そうした公共性というものがきちんと担保されるような図書館運営が望ましいと思っています。こうした市民、NPO 法人に託すというような新しい実験のようなことがうまく機能するように、引き続き見守っていきたいと思います。
高橋委員長　では、岩野委員さん、お願いします。
岩野委員　はい、藤沢市の図書館事業については、本当にきめ細やかにやっていただいていて、市民も満足して利用している部分もあると思います。辻堂図書館の NPO 化云々のお話に関しては、図書館の中にいる方によるといろいろあるよというお話を伺ってはおりますが、利用者の側の話だと、NPO になったことも知らなかった、全然変わらないよねという話も伺っておりますので、結局は市民が満足していればよいのではないかなと感じています。他市の図書館も見させていただく機会も多いのですが、そういうところと比べると、藤沢市の図書館はリラックス機能と言いますか、本当に本はたくさんあって便利なのですけれども、子どもたちと親子で楽しく読む場所だったり、ちょっとお茶を飲みながら本を

読んだりできるところが少なくて、本を汚さないとか、大事にするとかそういう部分で問題はあるのでしょうが、いろいろな試みをしている図書館もたくさんあるので是非そういうところも参考にしながらサービス内容に関していろいろ検討して向上していく余地があるのではないかと思いました。子ども読書活動に関しては、図書館だけではなく、学校図書室の方が本当に保護者には評判がいいです。子どもたちもとてもよく図書室に行くようになったということを現場でよく聞きますので、図書館だけでなく、一番身近な学校図書室もよく利用されるようになったのだなと感じています。大人も図書館に行く場合が多いのでしょうけれども、小さい子どもを連れた親子連れが図書館に行くのが割と多いのかなと思います。私たちの年代だともうスマートフォンとかで８５円ぐらい払うと読み放題で昔の名著とかを読めてしまいますので、そういうところで読んだりとか、本を返すのが面倒くさいから私は古本屋で取り敢えず買っておいて、読めるときに読むわと言う方もたくさんいらっしゃるので、そういう方たちをどのように図書館に呼び戻すのかというところもこれからの課題になってくるのかなと感じています。

高橋委員長　では、北橋委員お願いします。

北橋委員　はい、図書館に関しては感謝しているところが多いです。幼少の頃、兄弟そろって藤沢の図書館に通ったことを思い出します。今は湘南台に総合図書館があるので非常にありがたく利用させていただいています。コンピューターも入っていてすばらしい図書館だと思います。どこで借りてもどこで返してもいいみたいですし、ホームページを通して新刊書がわかるというシステムも非常にありがたいです。一方で、人の集まるところなので、居心地がいいかどうかと言うことも非常に大事なことだと思います。湘南台図書館については大変居心地がいいので長期的に滞在されている方がいらっしゃるみたいなんですけれども、まあ善し悪しですよね。雑誌も読めるし新聞も読めるし冷暖房完備だしということもありますけれども・・でもそういう人も入れると言うことはすばらしいですし、家族でカード１枚というシステムですけれども、うちは家族１０人で全員カード１枚ずつ作って、お互い融通し合っているところはちょっといいのか悪いのかわからないですが、本も CD も DVD もだいぶ借りています。で問題は、そういう本を利用して一生つきあえる子ども、一生つきあえる児童生徒になっているかなと言うことを思います。先ほどこども読書活動推進事業というのをがんばっていらっしゃるので、これに興味を持ちました。ブックスタートですが、そういうこともやっていらっしゃるということなんですけれども、学校の図書館と市民図書室と図書館がみんなつながっているような感じで考えています。お話会とか読み聞かせとかをやっていらっしゃいますので、そういうところの連携性、融通性というのをもっとこれから進めていってほしいなと思います。それから今の時代の子どもたちに言いたいことは、借りるのは大好き、返すのは面倒くさいというのがありまして、本を返さない子どもが多いですね。そこのところのルール作りなんですけれども、やはり、借りたものを大事に使って返すと、本を大切にするということは今薄くなっているなと思いました。ですから、本を大切にする、公共のものを大切にすると言うのは図書館

の一つの使命なんじゃないかなと思いますので、ちょっとうるさく言うのは難しいけれどもルール作りはこれからもお願いしたいと思います。今アプリで便利な世の中なんですけれど私としては図書館制度はまだまだがんばって維持してもらいたいと思います。全国的に自慢できる藤沢の図書館を維持管理してほしいなと思っています。一言言いたいことは、ホームページがわかりにくくなりました。だんだん良くなると思いますけれども、宅配のことも点字のことも含めて日本一の図書館を目指してほしいと思っています。まだまだ進化できると思っています。私も一生つきあいたいと思っています。

高橋委員長　私からも意見を申し上げます。私も年齢が高齢化して、自分の時間がほしいなと思うんですね。私は大和市に住んでいますが、読みたい本、小説などを読みなくなったときに、やはり図書館へ出かけるんですね。図書館の蔵書が充実していると言うことは、その市、その町の文化的な指標ではないかと思っていて、以前見たことがあるんですが、日本青少年研究所という千石保さんが所掌なさっているところで、世界の高校生に対して、たとえば宿題であるテーマを調べなさいと言われた、それであなたは身近な図書館へ行って調べることができますがという質問に対して、日本は意外に低かったんですね、イギリスやフランスやドイツはさすがで、身近なところに図書館があって調べることができるという答えが多かったのですが、それはやはり町の成熟度、あるいは文化的な成熟の度合いが高いなと思っていて、我々何となく、たかが本というように思っているかもしれませんが、でも、実はこういう風に蔵書をそろえ、いろんなニーズにあった書物をそこにストックしておくというのは、その街の成熟度だし、市民の成熟度を保障するものだと思っていて、そういう意味では総合市民図書館でも蔵書の数は増えていますし、意見のあった辻堂市民図書館でも利用者の意見としては、満足度が非常に高いと思っています。新井委員さんからも言われましたが、指定管理にすることによってサービスが落ちるのではないかという心配をするんですが、移行したことすら気づかなかったと言う人が７８％、８割方いらっしゃるということで、私はこれはこれで成功だったんじゃないかと言う風に思います。それから、ブックスタートですね。私も実は大和の社会教育委員会の議長だったときにこれを始めました。赤ちゃんの何ヶ月かの健診の時に袋に絵本を２冊ずつ入れて配布するという、私の家内が栄養士で、その作業のお手伝いをしたことがあるのですが、やはり子どもの頃から絵本というのが身近にあって、それは絵本を赤ちゃんが読めると言うことではないんです、お母さんが子どもに対してそれを読み聞かせをすると言うこと、子どもをテレビで子守するのではなくて、絵本を間においてくまのプーさんとかそういう話をする。新しい学習指導要領で伝統文化と言うことが言われて、私もそれは大事だと思うのは、もっともっと基礎的なところで物語り、日本の昔からのいろんな物語があるわけです。伝記とか、そういうものが今、あんまり子どもたちに家の中での伝承がなくなってきている。親が忙しくなっちゃったということもあって、なかなか親と子が一緒にいられない。それで絵本とか本を通して親子とか子どもたち同士がふれあうと言うことを、このような支援を通してすすんでいけば大変ありがたいと思っています。点字の図書館事業の方もすすん

でいると思っています。図書館に関しては藤沢市は芸術文化と同時に文化事業に関しては「藤沢市に行くといいよ。」と言われるようになってほしいと思っています。
高橋委員長　全体を通して藤沢市教育委員会に対して評価委員のみなさんから何かアドバイスがありますでしょうか。ご意見やコメントがあればお願いしたいと思いますが。
新井副委員長　では感想だけ。今日の点検の中でありましたが、藤沢市の取り組みを見させていただいて、教師や学校を支援していくという姿勢が明確でとても大事だなと思いました。今、いじめ、自殺事件などをはじめとして学校や教師は何をしているんだという、教育委員会は何しているんだという不信感のようなものが高まっていると思うんですが、そういうものに乗じて教師というのは放っておいたら問題を起こすというような不信感に基づいた政策といいますか、いかに問題のある教師を発見するかというようなところが強いと思うんですが、そういう学校や教師を懲罰するような施策ではなく、基本的に学校や教師の可能性を信頼ながらそれをサポートしていく姿勢を示している施策ということで、藤沢市は非常にがんばっているなと思いました。ただし、保護者や住民の方からの不信感や批判と言うことに対して双方向のコミュニケーションというものをしっかりと確保していくことが大事だと思いますので、教師や学校に任せておけと言うだけでは今後うまく機能しないだろうと感じています。
岩野委員　何かアドバイスをと言われても・・と言うところもありますが、感想を。
PTA も今参加する人が少なくなってきていますし、子供会も活動できる団体がここ１，２年ぐっと少なくなって来ている、それから自治会なども新しいマンションなどでは作らないと決めているところも結構出てきて、藤沢市の地域の年配の方たちはとってもよくやってくださっているのですが、自分たち世代の大人が自分たちだけが良ければよいと言う考えになっているのを感じていますし、そういった中で学校教育や社会教育をしていくのは大変なんだろうなと感じています。ただ、先生方も特になんですが、私たち PTA に対して理解が足りないなあとか、勉強不足だなあと思うことが多々ありまして、校長先生でさえも、時々「は？！」とこちらが思ってしまうようなことをおっしゃる方もいらっしゃるので、保護者の側としては、もっと保護者と先生の連携と言うところに対して、理解とお勉強をしてほしいと言うことを日々思っておりますので、そういうところを是非考えていただきたいと思います。また、私たちやもう少し下の年代の大人たちを、どういう風に良い藤沢市民にしていくかと言うところが、学校を出てしまった後、そういう大人たちに育てられているこどもたちはいったいどうなるのといったところが怖い部分でもありますし、今まで常識的に地域とかにかかわって育てられてきた子どもたちとの間に考え方に関しても常識という点に関してもギャップが広がっているなと言うことを感じておりますので、そういうところを埋めていく作業ができる活動が何かないのかなと、そういうところを教育委員会でやっていただければいいと思います。
北橋委員　教育委員会についてはがんばっていらっしゃるなと思っています。今、新聞等ではいじめの問題や青少年の非行の問題も出ていますね。世の中が変わったんだという風

に言いたくなってしまいますけれど、ベースのところでは、親子関係であったり学校での友達関係から始まっていると思います。親子関係に関してはまさに私たちの世代が子どもたちにいったい何をしているのかということを日々反省しているところですが、子どもたちと対話か少ないとか、実際に学校へ行きたくないという子どもたちも何人も出てきてしまって困ったなと思っているんですけれども、親子関係がベースじゃないかなと思っています。子どもたちとか地域をよくするのは。親子関係から始まって、そこから家族的に、コミュニティ的に友人を作ったり、先輩後輩になっていくと思うので、保護者に対してまずはお子さんと仲良くしてください、お子さんとコミュニケーションを取ってくださいという、親子関係について学校や教育委員会がもっともっと口を出してもいいのではないかなと思います。

保護者としてはよそのことが気になるんですね。よその家の子どもが気になる。地域のことが気になる。どこまで関わっていいのかわからない。取り敢えず学校の先生に頼るしかないとか言うことが多いんですが、先生も地域の情報をどんどん吸い取ってもらいたい。地域の発信しているものを先生も学習して蓄積して、子どもたちに対してフォローしたり、今度お祭りがあるんだよ、一緒に行くかいみたいなことをいっていただければありがたいし、あまりはめを外すなよってこともいっていただきたいんだけれども、親子関係を大事にしていただいて、あと、叱るべきところで叱るような大人をどんどん増やしていただきたい。先生が叱れなければ、地域のおやじが代わりに叱りますから。そういうところで連携をしていただきたいと思います。いじめ問題はなくならないかもしれないけれど、藤沢市に関しては対策は進んでいると思います。隠さないで、つねにアンテナを張っておいてほしいと思います。大事なのは親子の連携と地域の力が良くなれば教育は良くなると思います。おじいちゃんおばあちゃんもおやじたちもお母さんも利用してもらって子どもたちの教育環境をつくって行ければいいなと思っています。

子どもたちは習い事が多いんですよね。夜の１０時に子どもたちが塾から帰るんですよ。それを見ていて、どうなってるのと思うんだけど、周りの子どもたちから声をかけていこうと思いますけれど、家庭の中で親の方向を見るような子どもになってもらいたいですし、親も子どもを見てもらいたいなと思っています。教育委員会として、親子関係をはぐくむような施策をしてほしいなと思います。是非気楽にお風呂屋さんに行ける社会になってほしいなと思っています。

高橋委員長　私からも一言申し上げさせていただきたいと思います。藤沢市教育振興基本計画ですが、策定する際に私も委員の一人で北橋さんたちと一緒に本当に喧々囂々というか、まとめるのが大変なぐらいの議論をしましたが、でも、自分たちの市の教育のプランを作って、それをみんなで運営していくということができる教育委員会であること、それに私も関わったことを誇りに思っています。今、文科省の行政も地方分権化ということで、学習指導要領も以前は法的な拘束力の中から出てはいけないというニュアンスがありましたが、今は最低基準だという文科省の方もいます。それぞれの自治体の実情に応じた教育

政策を作るべきだ。私全く同感なんです。また、神奈川では私から見れば横浜と藤沢が二つのうらやましい都市であります。藤沢は一つの文化的なイメージが強いです。先日も教育委員さんがお話しされていましたが、教育文化振興に関しては藤沢は力を入れていると、まさにその通りです。藤沢市が自分たちのまちの次世代に自分たちの知恵を伝えていくと言うことでこういう振興計画をつくっていただいて、それをまたこういうかたちでオープンに議論し合うと言うことを、委員会の方々にありがたく思っています。是非こういうかたちでみんなで議論していく、オープンにしていく、説明していく、もっと言うと市民に訴えていく、今新聞では教育委員会の機能不全ということが言われています。私は、一般行政とは独立して教育文化事業に関しては教育委員の方々が見識を持って立案していただいて、それをみんなの知恵で市民の全体が支えていく、今は学校を消費の対象にして、自分の子どもの学力が上がればいいような人もいますが、それは違うかなと思っていて、学校はやはりみんなが支えるもの、そして次の世代を育成するものなんですね。みんなで。そういう太い流れが藤沢市の中にはしっかりと根付いているという実感があります。私は今回の委員会に対して、特に格別申し上げることはないと、延々申し上げましたがそういうことでございます。